



佛  
季  
上





大 增 補 季 寄 持 扇

附 録

白 旌 坊 苗 代 水

青 雲 堂 梓

俳諧持扇の序



常小腰巾を物小對

人<sup>アイケイ</sup>之<sup>ノ</sup>愛<sup>アイ</sup>敬<sup>ケイ</sup>の<sup>ノ</sup>嫌<sup>ケン</sup>は<sup>ハ</sup>此<sup>コノ</sup>

の<sup>ノ</sup>扇<sup>セン</sup>形<sup>カタチ</sup>の<sup>ノ</sup>愛<sup>アイ</sup>敬<sup>ケイ</sup>を<sup>ヲ</sup>眼<sup>メ</sup>り

し<sup>シ</sup>て<sup>テ</sup>人<sup>ヒト</sup>情<sup>ナリ</sup>の<sup>ノ</sup>中<sup>ナカ</sup>に<sup>ニ</sup>好<sup>ヨク</sup>み<sup>ミ</sup>る

の<sup>ノ</sup>俳<sup>ハイ</sup>諧<sup>ゲイ</sup>な<sup>リ</sup>に<sup>ニ</sup>い<sup>ハ</sup>す<sup>ス</sup>は<sup>ハ</sup>金<sup>カネ</sup>堂<sup>ドウ</sup>

と<sup>ト</sup>い<sup>ハ</sup>ふ<sup>フ</sup>人<sup>ヒト</sup>は<sup>ハ</sup>扇<sup>セン</sup>を<sup>ヲ</sup>造<sup>ツク</sup>る<sup>ル</sup>

四<sup>シ</sup>時<sup>ジ</sup>と<sup>ト</sup>雜<sup>ザ</sup>の<sup>ノ</sup>五<sup>イ</sup>ツ<sup>ツ</sup>を<sup>ヲ</sup>め<sup>ス</sup>る<sup>ル</sup>は<sup>ハ</sup>

志<sup>シ</sup>と<sup>ト</sup>わ<sup>カ</sup>る<sup>ル</sup>を<sup>ヲ</sup>い<sup>ハ</sup>ふ<sup>フ</sup>

ま<sup>マ</sup>先<sup>マ</sup>や<sup>ヤ</sup>う<sup>ウ</sup>人<sup>ヒト</sup>の<sup>ノ</sup>彼<sup>カ</sup>是<sup>シ</sup>を<sup>ヲ</sup>い<sup>ハ</sup>ふ<sup>フ</sup>

あ<sup>ア</sup>つ<sup>ツ</sup>先<sup>マ</sup>て<sup>テ</sup>持<sup>テ</sup>扇<sup>セン</sup>の<sup>ノ</sup>う<sup>ウ</sup>ら<sup>ラ</sup>書<sup>キ</sup>

甘<sup>カン</sup>し<sup>シ</sup>不<sup>フ</sup>雅<sup>ヤ</sup>友<sup>ユ</sup>友<sup>ユ</sup>冬<sup>フユ</sup>扇<sup>セン</sup>の<sup>ノ</sup>う<sup>ウ</sup>ら<sup>ラ</sup>

い<sup>イ</sup>く<sup>ク</sup>持<sup>テ</sup>扇<sup>セン</sup>の<sup>ノ</sup>あ<sup>ア</sup>や<sup>ヤ</sup>ま<sup>マ</sup>も<sup>モ</sup>る<sup>ル</sup>



秋の夜をこゝろに考じ  
の考訂を海を要と括り  
をてめ成すその持存  
の幸なるなりぬあはれいづく  
吹塵凡右小欠へううさる  
そのにそ秋も持存する  
おのりうさうりりり

丙寅孟夏

蘆明庵五休識

大増補四季の持扇

山金堂主人著

椿園主人補

春 あはれ 春の蠢動して生むる顔春晴  
ふれ意をハあるへ又春を

張る草木の ふんぞり 大簇と  
芽のそるこ いふハ太は

ふびくと訓簇はまむとよあり春  
の陽氣そ万物をまき生むる心あり

○立春 節 大寒の後十五日  
斗寅より建あり

甲立春の後十五日  
斗寅より建あり

正月 ○睦月。孟春。王春月。暇  
月。夏正。太郎月。初空月

○霞初月。早緑月。年端月。暮新  
月。初春月。祝月。年待月。とらの月

元日 元旦 歳旦上日 履端けさの春け  
ふの春四方の春を空初く月の

ふの年とくわつ君の春の代の妻



○國柶奏 國柶笛応神天皇芳野へ行幸の時芳野

與國柶よりふ処の者よりて醴酒を奉る其後毎年羊羹肉にて年魚やうの物をさきり歌をうたひし今も羊羹肉を

る支八あり今國柶の奏とて歌流し

笛やう芳野より ○腹赤の奏 腹赤の費

とも云流紫より ○袂園の削掛朝

寅の一天祇園の社とて松の木に削掛

新しき火をたいて大腹雜賣のたぬ

用ゆらとあり洛中洛外の家より

あの大をうけよま話の人おびた

一説は大晦日の夜あり ○門松

まろちあやうあり ○建松。飾松。飾葉。注連飾。飾竹。飾繩。飾炭。飾海老

門の神棚 在家の妻戸に柵を架

へて祭る夜を土雲よ灯

まど供へ ○齒祭 裏白。山。さき

はらへ 齒は齒より染る

えびとむらあり齒長くそとこのぶる

といふ意そそき用とての上齒祭

兩の物 小土雲又 ○俵子 海苔より

云或は海男子とよと云 又干鰯

太郎子の畧とあり ○小殿原 田作

鯛の 田の ○田作 乾鰯魚この物をとて

莫 田の ○押鮎 鮎は異名年魚より押鮎は鮎鮎

日記より ○海産の身 海底より

倍の音を 海師の身 ○數の子 正字は棘輪とてか

借て ふの ○梅干祝 又梅干し

祝 りよ俗宝珠 ○門の礼帳 正月門に礼帳

な 出に記さる ○上辰の枝 高祖の宮中正

出 月上辰池 ○葩剪賣 そせり

以て妖邪をくらふとあり ○年男 年始の

昔 元日 ○庭竈 氏家庭に茶を煮き

福葉布 唐葉を布て物をとらふ事  
葉をまきふ不潔を拂ふ事

福鍋 七日の粥を煮て食ふ事  
福の條の長名あり又福

○喰積 蓮葉の條を葉  
煮て粥を食ふ 物を積りて長寿を

得んの ○やー玉 新年の節の今の  
人靴を三枚

子板 ○胡鬼板 ○破魔弓 破  
○羽子 ○退し羽

夫 ○毬打 袖ぎてくつりぐ。練衣の厚  
板をまのみにくあてて是れ也

て遊ぶ事候の事 ○宝引 御引  
あそび候の事 ○弓始

馬乗始 ○藏開 ○湯殿始 ○おめ

始 火水ことごと又内裡にてまをむめと  
月いふま始の事候あり又一説は

名編練にて粥の粥の煮くまこしは飯之  
をせ候食事候事候と本べー今も

のりまのい六編 ○着衣始 衣服をま  
練のまこと云

船乗始 ○船灵祭 船は酒饌を供  
以船神をまつ事

名雪おはまをせのまき ○杠 祝事  
物あそび春の祝は用也

草 ○懸鯛 元日鯛魚一双葉を  
以喉を然し齒菜ゆり

葉を掃く電の上掛 ○歳徳神  
あそび候け期候事

○惠方棚 葦利賽女の神を惠方祝  
して鏡餅雜煮を供へ

祭 ○元日不開戸 江戸の高家元日  
く戸を開き一日

廣勢あり又俗間家内を掃除せしは新  
年の陽氣をやりんまの儀あり

昆沙門功德經 京の町に鞍馬の昆沙門  
天の紙符とる夷の筒

をまき ○若夷 夷夷のれを  
市にてまき

廻 又夷の祝の儀あり ○大黒舞  
假師の事あり

悲田寺の外に惣ありまの姿あり  
しをながく門く来り若あり ○春

駒 正月七日の白馬を模した葉を  
駒を路上にまき候事候

鳥追 元日より十五日まで田疇の事を  
追ふ事候今も鳥追の婦女

備前を頂き門へ ○傀儡師 拾州西のまろ

出りの ○猿曳 漢よまきを 担ごりふ ○大

服 元日小松をぶくよ ○若水 包井 井華

水○若水桶○初 手水○井初まき ○若餅 二月日あそよ 餅

を雑煮よ ○雑煮祝 ○美を祝ふ 用ゆ

美ハ雑煮調へららち ○いもれかき 半 の城云云即雑煮

○結昆布 ○大根 〇関 〇関

牛房算木牛房 〇大箸

算木のや 〇関豆 水漬の豆

加賀御草 大内そ餅の上 〇蓬菜

飾 喰摘 〇穂俵 〇榎 〇搦栗 〇串 〇齒朶 〇櫛 〇穂長 〇裏白 〇見

布 〇野老 〇海老 〇蟹斗 〇あむき

幸木 〇幸籠木の枝をわけてまゝ魚 鳥菜葉をのけて電の上をかざ

〇三物俳諧 〇三物連歌

〇三物賣 〇去年今歳

御慶年始状君が春十代の春古

年新らき年若き年宵の年

何の年 〇初鶏 〇初

夢 〇宝船敷 〇試筆 〇試毫 〇言書

初曆 〇書初

春

五

彈初ひきま琴瑟びんぼ笙しやう琵琶びば三絃さんげん ○吹初ふき簫すゐ ○舞まひ

初樂はつがく田楽でんがく ○謠初うたはつ子こ松柏しょうはく子こ松しょう 〓初春はつしゆん

樂がく春しゆん鶯うい轉てん梅ばい枝し訊しん青せい柳りゆう

帳ちやう絨じゆう ○十じゅう日にち帳ちやう ○限かぎ ○店卸てんしゃく ○帳ちやう ○歳さい

旦たん閑かん ○節せつ小袖せうそで ○節せつ振ふり

舞まひ 〓初はつ芝居しばい ○万まん歳さい

法師ほうし ○三さん河か方ほう丈ぢやう ○寐み積せき ○寐み飽ほう ○御ご

降かろ 元げん日にち ○水掛みづかけ祝いひなせ ○初はつ芝居しばい ○万まん歳さい

〓懸想けんさう文賣ぶんばい 〓懸想けんさう文賣ぶんばい

桃とう符ふ桃とう板ばん桃とう梗けい ○神しん茶ちや樹じゆ爵かく壘らい

雞けい貼てう ○葦あし索さく画が鷄けいをを戸こ上かみ貼て ○葦あし索さくをを戸こ上かみ貼て

〓懸想けんさう文賣ぶんばい 〓懸想けんさう文賣ぶんばい

桃とう符ふ桃とう板ばん桃とう梗けい ○神しん茶ちや樹じゆ爵かく壘らい

雞けい貼てう ○葦あし索さく画が鷄けいをを戸こ上かみ貼て ○葦あし索さくをを戸こ上かみ貼て

〓懸想けんさう文賣ぶんばい 〓懸想けんさう文賣ぶんばい

桃とう符ふ桃とう板ばん桃とう梗けい ○神しん茶ちや樹じゆ爵かく壘らい

雞けい貼てう ○葦あし索さく画が鷄けいをを戸こ上かみ貼て ○葦あし索さくをを戸こ上かみ貼て

〓懸想けんさう文賣ぶんばい 〓懸想けんさう文賣ぶんばい

桃とう符ふ桃とう板ばん桃とう梗けい ○神しん茶ちや樹じゆ爵かく壘らい

雞けい貼てう ○葦あし索さく画が鷄けいをを戸こ上かみ貼て ○葦あし索さくをを戸こ上かみ貼て

〓懸想けんさう文賣ぶんばい 〓懸想けんさう文賣ぶんばい

桃とう符ふ桃とう板ばん桃とう梗けい ○神しん茶ちや樹じゆ爵かく壘らい

雞けい貼てう ○葦あし索さく画が鷄けいをを戸こ上かみ貼て ○葦あし索さくをを戸こ上かみ貼て



社内にて系傳の人々神  
符を授て是を卯のれと云  
根元云云卯杖とハ持統天皇三年正月  
卯の日大嘗會の事也トあり

二宮此大饗 二日王卿以下二の宮へあり  
お礼ありて饗まつくあり

○朝觀の行幸 二日天子年のちりめ  
上皇及母后の宮へ  
行幸あり

○春永 永日永陽あり  
いふ祝のありあり

○臨時客 攝政内白の家は大臣以下の  
公を招きて遊しあり

○摩那切 定むる公勢ありこれハ  
臨時ありあり

○愛宕天狗 二日高橋大隅の處家  
是を行ふ夜あり

○だう藥 客殿ありあり各宴飲あり  
是を天狗の酒ありあり

○東叡山 三日主上八十瘡膏あり  
膏を茶を進むあり

大黒湯 三日武江東叡山中護国院は  
大黒天あり正月三日餅を湯は

○履新の慶 浸り系傳の今ハ然也  
あそを大黒の湯あり

○かみ 履新の事あり左傳ハ昔昔ハ  
年の端をあらへて髪をあらへ

○叙位 神あり前室より外あり  
は元日より餅を供ふるを後保といは

○萬歳 五日六日法皇の年福を奏し  
次升り位を叙まつあり

○木造始 禁裏の  
行夏あり

○六日年越 七日式日あり  
今日をいあり

○白馬節會 七日白馬あり  
あそを中して七日白馬

○人日 七日正月一日を指し二月八日  
三月八日四月八日五月八日六月八日

○靈辰 馬七日八日  
老より云天地ハ家  
物の父母人ハ万物の

○七日正月 本物あり今日を  
立返向の事あり

○初若菜 若菜あり  
○七種 七種あり



と三井寺門前の人と名致すは出て来たを  
別れ互う大徳を引争ひ各々大徳を  
ら競ひ争み引争らる方々の幸福を  
得るといふ十三日あり十四日の朝いよいよ

去る ○粗盆松盆爆竹 本邦の  
あり

長三線お又三元張  
はくも有り ○菱葩ほあま

爆竹の火を鏡を焚くはふとを菱葩  
ほあまといふはくも有り

唐山の佐上元の日  
○御薪木 十五日  
百友巻

灯燭をかかると  
く菓を献りて  
肉者へ納らると

○粥の木 十五日粥  
粥の本まで

女の尻をうてが男子をりつ呪ことして  
打とあり女をせんと坊に托す低が

柱 粥の中へ俵を入せて  
信ふまをりふあり ○小豆粥祝

十五日紅調粥枕を紙に十五日のちかひの  
せくあわるとありいふのちかひ

○平岡の御粥 内國恩知子屋の林  
おとせ粥を煮て田島

の若山とよふ  
○粥とよふ  
○土龍打 地をうむ

十四日成へ ○三保祭 十五日後河國養友  
形もあつて羽車後田

の社に本社を去るの南  
町余外流の湯屋あり ○獅子頭の神事

十六日伊勢國夜合祭山田の心ありあつて  
本社獅子頭を祀り本夜祭とす

女踏歌 十六日の男踏歌のあと一帯  
の男女若くは唄ふおとめをせり

年格の祝詞を述べたはくはくお教をうむ  
請ふたすのちあふあふ十六日はあり

賭弓 十八日あり天子弓格成りて弓を敷  
活ありては肩を方より射るを

初は徳を方より射るを奏せ奉り  
後はお射るを管を方より射るを

と ○厄神詣 十九日山城八幡あり  
云 各所の人権民お來の本

災難を拂ふあり ○音の清寂 十九日厄  
神をせ

らあり林床屋より土床の口幣をせ神機  
官夜を亥時刻に神行せらるあり

女節分 十九日是は去  
田の夜神遊 ○骨正月 永大  
極是

秋年の未だ、必、神の腫を用多々の魚  
肴、大、豆、の、糖、を、入、せ、煮、て、煮、物  
と、す、ま、あ、ら、ま、

○廿日正月  
本日、依、古、の、日

○天穿  
係、を、

○女入鏡臺祝  
本日、初、教、と、言、判

○嚴  
お、近、ま、た、か、い、い、ま、い、せ、い、ま、い、後

○内宴  
あ、い、え、ん

○御  
き、よ

○島祭  
あ、ま、ら、う、下、ま、あ、ま、ら、う、安、氣、を、祈、る

○敷入  
あ、ま、ら、う、

○初天神  
あ、ま、ら、う、

○餘寒  
あ、ま、ら、う、

○残雪淡雪  
あ、ま、ら、う、

○初不動  
あ、ま、ら、う、

○郎分草  
あ、ま、ら、う、

○若草  
あ、ま、ら、う、

○土筆  
あ、ま、ら、う、

○福壽  
あ、ま、ら、う、

○蘆蒿  
あ、ま、ら、う、

○菘菜  
あ、ま、ら、う、

○下萌  
あ、ま、ら、う、

○蕪堀  
あ、ま、ら、う、

○鶯菜  
あ、ま、ら、う、

○野菜  
あ、ま、ら、う、

○水菜  
あ、ま、ら、う、





折柳旅之留別 ○椿玉枝。保覽。換

花列椿 ○陽炎系遊うけふいそや

唐唐 ○片唐片

三葉片三月末より

月專あづきん ○波稜菜三月種。物。春。信。不

穀精草内田の中。生。出。せ

独活くそわ ○茲姑鳥羊 ○摘草雑菜

山葵山中の水。近。き ○木地の爐縁春

春宮東宮 ○朧月 ○春雨

莖雨膏雨 ○紙紙。老。時。風。中。共

風箏紙。老。時。風。中。共 ○春の夜

○朧夜あつ ○春の朝春の日のけがれ

○春あつ ○春あつ

○春興春の世に。運。び。て ○春望

○春山春の山 ○春野

○春郊春の郊 ○春

○春の川

○春の海

○春の川

○春の海

○春の川

○春の海

○春の川

○春の海

○春まけて春より向てありまゝありて  
八雲方向てより万葉集中より出づるま  
けて六方の字を畧  
せりあり

**二月** 律夾鐘の律の名之夾を  
字用也百の物に金

○驚蟄 節雨水の後五日  
卯甲は建をいふ

**春分** 甲 驚蟄の後十五日卯甲は建を  
いふ九十日の事といふるは又分をいふ

○仲春。令月。如月。梅見月。陽中  
○小春生月。社花月。雪消月。養老著

**中和節** 朔日唐の徳宗の時  
上巳九日加之三言也 ○獻生子

唐山民間の若青き袋は百穀凡果の種  
をまきて相共くまゝおろして祝ふ是を

○二日灸 二月二日男女灸長  
を医出は八月百計

○初午 初午  
は

○水間祭 上  
午

泉州竜谷山水寺聖武の勅行基并  
天平年中の開基あり奉る正教行基

○東 東  
を

**福寺懺法** 上午日直日山本福寺は法の東  
南あり懺法は天台大師

○本妙寺 本妙寺  
は

**春** 上午江右三上山の辺より河沿あり今も二  
月廿午法あり此寺山門は舊し

○釈奠 釈奠  
は

**春日祭** 春日祭  
は

○魔耶奈 魔耶奈  
は

**吉野の餅配** 朔日花供懺法の支行人  
奉堂へ出て御膳を配し

○新の能 新の能  
は

○二月堂の行 二月堂の行  
は

春 春  
は

十四



初日より十四日まで由緒東大寺の御  
牛王加持の法上七日六土儀類者下七日八  
小親者あり勤る侍を

○氷取 二月の  
あまりの侍ありあう

○事 他井あり侍ありあまを侍侍井  
いふ其日の井を取りて侍はあう

納 八月廿四日 祈年祭 四月廿四日  
六賢汁 官に於て

○園韓兩神祭 是をまつるを年を  
り、むも来とあり

○行基祭 上二神と宮内者  
神あり本荒神といふ是

○祇園御八講 伊の山長谷川迎致あり行基達を  
此一取の軒あり縁記累々忠夜ありとい  
りといふも宮あり

○社日 八講といは法花八の考の六  
をまつるを年を

○列見 一近き日の日といふは日お地の  
亥神を祀りまを年をい

土日六任以下の祭能ありを松きて  
式部多部の二省よりつとあを上り  
たる政友ありとせそ雲星宮儀を見  
まを上り下り時野は掃政の花あり

○湯島天神砥餅 十日江戸湯島  
天満官別當

喜見院より秋日餅を砥石のぶく四角  
よりち神供いほ氏子に配り世儀湯島  
の砥餅

○遺教經會 九日  
と秘せ

○比良の八講 近江の比良  
高あり

○花朝 十五日  
○花朝 十五日  
○花朝 十五日

○雪の果 毎年六月の  
清い雪の侍あり八但樂あり

○西行忌 十五日西行法師  
をまつるを年を

○治尊酒 十五日  
耳をまつるを年を

○暖哦の柱炬 十五日  
をまつるを年を

○餅花奠 十五日  
をまつるを年を

と葵をまつるを年を

と葵をまつるを年を

と葵をまつるを年を

と葵をまつるを年を

と葵をまつるを年を

と葵をまつるを年を

と葵をまつるを年を

と葵をまつるを年を



合は食麻と ○蕨 ○早蕨 ○獨蕨 ○  
あるそあり

○山根草 花玉根よ ○蒲公  
の茎と

○異名 僕公眼金浦公丁 ○松菜 ちけて  
○和名 ひらひら

○狗脊 大蕨草の形ち脊骨の如く  
別は ひらひら

○杓把 本草曰杓把春青清  
と名づく

○五加木 異名を  
冬に地骨根と云ふ

○八角茶 五佳一技の五葉あり ○虎  
よと名づく

○連翹 ○韭  
杖 一名はひらひら

○蒜 ○胡葱 ○野蒜 ○水葱摘 一名  
蒜

○菜の花 ○大根花 ○薑  
草 女児の戯れは薑を結ぶ

○草の 草の  
若葉 ○赤黒の薄

○秋の燒原 ○蕨  
末黒 ○草芳 ○角組芦 角の

○蓬摘 二月三月は摘むと上は  
鐵

○接骨木の花 ○銀杏の花  
多

○若紫 若紫の ○紅梅  
○智の香梅 ○赤梅 ○松中梅 ○雲輪梅

○八重梅 ○若梅 ○櫻梅 ○彼  
岸櫻 小

○山櫻 日本あり  
○糸櫻 一種

○糸櫻 一種

○糸櫻 一種

○糸櫻 一種

○糸櫻 一種

○糸櫻 一種

○糸櫻 一種

○糸櫻 一種

○糸櫻 一種

櫻のうす  
○二重櫻 ○姥くらら花

くまのあき  
○熊谷櫻 花の餅といふ  
あき名づく

よもぎにて八重  
○鬼くらら 山さくらの一  
の花ひらく

さくらのおま  
○犬櫻 櫻もかく櫻よ  
別種と云ふ

ゆきにて非あかりを大といひ鳥と  
ゆき大さく大巻鳥尻鳥あきこの影是

ふ ○椿 白玉椿 西入椿 ○二階椿  
○初花

花を待 ○接木 接種。春分前後  
を布とす

初雷初電 雷を初電を  
初雷初電

○菊の若葉 ○鳶の若葉 ○芳宜

の若葉 ○果鳥 果鳥は鳥のつら  
は鳥のつら

○雉 雉は鳥のつら  
は鳥のつら

○燕 燕は鳥のつら  
は鳥のつら

巢 古巢 ○帰雁 雁は鳥のつら  
は鳥のつら

○引鶴引鴨 引鶴引鴨は鳥のつら  
は鳥のつら

○松むす 松むすは鳥のつら  
は鳥のつら

○孕雀 孕雀は鳥のつら  
は鳥のつら

○孕鹿 孕鹿は鳥のつら  
は鳥のつら

鹿の角落 鹿の角落は鳥のつら  
は鳥のつら

○虫 虫は鳥のつら  
は鳥のつら

○蜂 蜂は鳥のつら  
は鳥のつら

○蝶 蝶は鳥のつら  
は鳥のつら

○胡蝶 胡蝶は鳥のつら  
は鳥のつら

○寄居虫 寄居虫は鳥のつら  
は鳥のつら

○馬刀 馬刀は鳥のつら  
は鳥のつら

○故小肥 故小肥は鳥のつら  
は鳥のつら

○諸子魚 三子首會の文 ○鮎の子 字不詳とあり

取 東医宝鑑 ○燕鯨 ○田螺 青魚○カトコ

田螺鳴く ○亀鳴 亀カ田螺も月のありき

蛙 異名と丁子蟹○石蟬と云

蛙子 一名と 無声 青蛙ホあり

蛙 江戸石川傳通院の蛙者なりと云

河鹿 一山蛙と封ト

蛙電 本草云蛙電莫秋反 ○蛇原 和名阿未加流

出代 昔ハ二月三日奴婢

三月姑洗 圍姑洗ハ姑ハ洗ハあらふ

清明 節 四月八日の後十五日斗

穀雨

甲清明の後十五日

○春分 ○春晩 二月廿四天王寺

經供養 本寺如志師紀 ○寒食 冬分とあまもる二百日自夜

○上巳 三日

○己の日乃枝 水辺は枝ト疾

○須六の枝 元

○闘雞 禁裏

○桃花節 ○桃

○白酒 御酒

草の餅 蓬候 ○饅頭 唐人

○雛遊 雛

雛飾。雛市。○青と踏三月三日踏  
儀。雛初青鞋履

上と唐の信上 ○油洛陽の婦人女  
己遊戯茶の湯

○曲水の會巡水宴會  
後なみせ ○巴

字水白ふむま ○御三月三日小湯  
曲水の形巴の字朗詠もあう

燈三日天子北手 ○柳の鬘三日上巳  
燈燈のとも 女児は蚊

柳白柳子 ○粟津祭三日  
柳白柳子 粟津祭三日

粟津祭三日 ○潮干今日  
粟津祭三日 潮干今日

蛤蛤 ○土佐の海硯石取三日  
蛤蛤 土佐の海硯石取三日

石山祭三日 ○石清水祭三日  
石山祭三日 石清水祭三日

一乘寺祭五日 ○吉野五日  
一乘寺祭五日 吉野五日

會式十日 ○壬生念佛四日  
會式十日 壬生念佛四日

水尾三月八日 ○水尾三月八日  
水尾三月八日 水尾三月八日

祭九日 ○吉野五日  
祭九日 吉野五日

會式十日 ○壬生念佛四日  
會式十日 壬生念佛四日

見見 ○壬生念佛四日  
見見 壬生念佛四日

融融 ○壬生念佛四日  
融融 壬生念佛四日

四四 ○壬生念佛四日  
四四 壬生念佛四日

世世 ○壬生念佛四日  
世世 壬生念佛四日

狂狂 ○壬生念佛四日  
狂狂 壬生念佛四日

受受 ○壬生念佛四日  
受受 壬生念佛四日

星星 ○壬生念佛四日  
星星 壬生念佛四日

荷荷 ○壬生念佛四日  
荷荷 壬生念佛四日

子子 ○壬生念佛四日  
子子 壬生念佛四日

南南 ○壬生念佛四日  
南南 壬生念佛四日

神神 ○壬生念佛四日  
神神 壬生念佛四日

飛飛 ○壬生念佛四日  
飛飛 壬生念佛四日

梅梅 ○壬生念佛四日  
梅梅 壬生念佛四日

春春 ○壬生念佛四日  
春春 壬生念佛四日

木母寺大念佛會 同日武及隅田川  
梅柳山隅田木

母寺より 十五日三月  
○勸學會 九月五日  
諸人家集

真林寺月輪院より 天台の大念法  
花を調む 紀典の儒者も詩聯句をまを

○淺草祭 十八日 参り 蕨市出州  
寺境内三社控現のあり

○人麿忌 十八日 官署御供  
を修むと今もなうて和歌者

流るる目を以て 十九日山城玉喉  
歌會を修む 御身拭 暖清涼寺の

本寺 釈迦女末 今日開帳あり 寺傍白中  
を以て仏像を拭ひ拂ふ身を以て拭といふ

○池上干部 十九日 廿八日まで 長栄山本  
門寺 法華經千 御影供 廿

都千口の淺瀬あり 日蓮宗 御影供 廿  
江戸近辺よりの大寺あり

弘法大師の御影供 仁和寺より外  
真言宗の寺院に於て是を修む ○永代

寺山開 廿日 江戸川富岡八幡宮の別  
當大栄山永代寺 廿日 三月

廿日 弘法大師の御影供を修む 此の節 永  
代寺の庭を以て法入より年々是を

山開より園中 晦日 茶人の炉  
はし多し ○爐閉 茶を修む 九茶

陽の法十月より 今月 此日限り  
すて四月朔日より 風俗あり ○順峯入

春大峯山上より 順の峯より  
本寺 聖徳太子の天宮あり ○小弓

引 昔内裏よりあり 杏の粥 ○  
地下にも毒のあり

東の鱈 ○田鼠化鴉と成 ○萍生

○初花 花さかり 花天 花  
のま 花の艶 花の艶 花の艶

○花の艶 花の艶 花の艶 花の艶  
○花の艶 花の艶 花の艶 花の艶

○花の艶 花の艶 花の艶 花の艶  
○花の艶 花の艶 花の艶 花の艶

○花の艶 花の艶 花の艶 花の艶  
○花の艶 花の艶 花の艶 花の艶

○花の艶 花の艶 花の艶 花の艶  
○花の艶 花の艶 花の艶 花の艶

○花の艶 花の艶 花の艶 花の艶  
○花の艶 花の艶 花の艶 花の艶

○花の艶 花の艶 花の艶 花の艶  
○花の艶 花の艶 花の艶 花の艶

○花皿 仏に供する花をとりての器 ○花雪 花散るをいふ

吹 花散るをいふ ○花園 宇治の花 ○花 園に秋

○花の縁 花もりのあま

○花細 花をちぢめる

法の花 雨花 智恵の花 是は皆

落花 飛花 惜花 惜花 殘花 はな

○櫻 山さくら。なまは桜。うらな桜

○八重櫻 山中の桜は八重桜。八重

晋賢像 花と鼻と茶と齒と訓四

楊貴妃 真福寺の

墨染櫻 名づく

珠櫻 くま。唐鞍の雲

虎の尾 八重

伊勢櫻 排

江戸櫻 花大痛

塩竈 花大痛

金玉櫻 一名直愛忘

五郎櫻 はる四つ

歌仙櫻 東叡山

秋色櫻 東叡山

櫻狩 東叡山

櫻田 名

人丸櫻 夢



見草曙草 ○青皮。○深。 仇名草

以上きくもの ○挑の花 ○昔桃。○歳桃。○油桃。○姫桃。○毛桃

又異名と三世草 ○白挑 源平

桃 ○金招桃。○白月桃 西王母 ○八重。○大福。○大壽

星桃 ○公重 海棠 ○睡

○藤花の花 ○花本邦。○あの方

荊花のう ○異名。○東苑。○道

○杏花の花 ○林檎花

異名と頻婆果 ○櫻桃の花。○榎花

花梅 ○石楠花。○唐人の詩

○沉丁花 ○瑞香。○春毛

の花 ○棠梨。○花 木心の花。楊

梅の花 ○葡萄の花 ○草龍珠

枣花 ○木蓮花。○胡

桃花 ○辛夷 ○馬酔木の

花 ○長春 ○日月紅。○圓雪。○石

○躑躅 ○山つじ。○餅つじ。○さしじ。○蓮

○瑤瑤 ○炬つじ。○源平つじ。○小式部つじ

○平戸躑躅 ○段

○映 ○蓮花の四種

○山紅 ○葉少。○圓く。○花赤。○又小映山

○藤の花 ○夏浪。○夏つ。○夏花。○夏葉

○天取草 ○異名也

○吉野 ○多。○遠く。○八重

○花黄 ○蓮花の四種

○花赤 ○花赤。○又小映山

○花白 ○花白。○物あり

○花白 ○花白。○物あり

○令法 夏のふき菜のまじりたる種ありて凶年より後より受て喰ふ

○通草の花 蔓草之花 紫或ハ白

○小粉團の花 こふり

○茶藤花 やまがき

○春 俗ハこまや 小米糲と云

○高麗菊 あつちきく

○東菊 あつちきく

○櫻草 ○旌節草

○九輪草 ○七重草

○仙臺萩

○華鬘草

○馬蘭 葉長サ 二三尺

○碎米

○母子草

○白茅 毛の白みと 秋に列ねる

○茨の花 雞頭。雁 頭。水落

○眉作花 薊

○美人 麝香。錦被

○海金沙 かまぐさ

○海老根 化偷草 本名宇波良

○蘓枋の花

○金盞花 長

○化

○春

○指頭

○花

○金

○紅

○色







中ノ如。法花ノ峯ハ幡宮ハ淡海國  
備生郡ハ幡村ニあり祭ル神名情

水ノ○多賀祭 近江國大上郡  
同ノ神伊弉諾

午或ハ上ノ巳日ト云ク ○堅田祭  
考ナリ例祭四月二日

上ノ○松尾祭 上ノ酉山城ニ有リ  
郡祭ル神大山飛

の神又ハ一祝市 ○當麻祭 上ノ申  
押島郡トモ云ク ○大和

國神林也世俗當ナリ号ス用明帝  
才四ノ皇子麻呂子創止ラズナリ

當宗祭 上ノ酉。河内志紀郡  
宗ノ社ハ仁和四年四月

始テ勅 ○梅宮祭 上ノ申。この祭今  
精カリ 八尾ノリト云ク

一尾ト云ク之ノミヨキ橋氏ノ祖  
カテハ倍姫ノ婦女當社ノ砂

ニテモ云ク ○大津祭 上ノ亥。四  
ノ佩ト云ク 宮ノ神社

ハ江州大津四ノ宮ニあり祭ル神小  
日枝大日枝氣比小淨師カケリ

山崎日ノ使 三日。日ノ使ハ八幡  
宮オノ社ト云ク

治兼三年逆程 ○水屋能 四日。吉  
勅使ノ事アリ 水目ノ

南郡水屋川ノ南ニ水屋ノ社アリ  
祭ル神ニ素盞盞島綿田根ノを

ノ日申ニあり北ノ登 ○廣瀬電  
能ト能ト云ク

田祭 四日。この社ハ大和云ノあり  
祭ノ日廢考之年ニ二度行ハ

ル儀ハ祭ノ日ノ大 ○擬階ノ奏  
忌見神ノを云ク

七日。誰々ト加階ケラズ云ク  
儀ニ奏テ奏後ノ事アリ

灌佛 八日。谷仏。仏生會。高華  
會。仏産湯。甘水。五香

水凡今日諸も備仏會と修も諸品  
の香を以て小堂を作りその中ノ

ちハミキ釈迦像を安置 ○賀  
て其料ホノ香水ト云ク

茂ノ祭 中ノ酉但シニツあせハレ  
酉ノ。祭祭。神形ノ日

。葵ノち。熱ノち。未ノ日ニ々陣  
ニ着テ六府ト云ク

を作テ當日ノ使ハ ○戒檀堂開  
近處の中おつと云ク

帳 八日。江州比叡山よりあり諸人集  
諸を女人常ハ叡山より多し  
とゆきも今日ハ許して東坂下花  
橋の社より下りて是を忌橋と云  
○花摘 前より傳教の母妙  
徳婦人を乞ふと云り

山崎祭 八日。山城公離宮ハ幡の  
傍より大山嶺の舎に

地主祭 九日。清水比古権現の祭  
にて林奥午刻還幸あり  
その後獅子舞田平ホ  
舞終りて康富祀さゆ ○練供養  
十三日より十四日よきて大和公當麻  
古よて法會を修と十四日練供養  
ありこれ中ね

○千團子 十六日  
娘の忌日あり 江州三  
井古の鬼子母神へ今日諸人集福す  
この神一千の子あるを以て團子一  
子を供も

○日光祭 十七日。十六  
日例幣使  
聖州日光山へ

○和哥祭 十七日。  
糸向拝礼之 紀州和  
哥山より東照宮の傍  
祭之一名雜賀祭とも云

○靈巖

寺千部 朔日より十日迄。江戸  
赤川乃本山灵巖寺よ  
て修

○浄心寺千部 十九日  
廿八日迄  
○法苑山浄心寺ハ灵巖寺の東南  
一所なりあり日蓮宗赤川一  
の古寺之毎年十日の間  
法華千部の護經あり

○高野

花供 廿一日。高野山宝亀院の  
住持代りてのこよ願  
ひそい色の虫衣と大淨よ  
きる色と忌付と云り

○山

王祭 申ノ日但二ツあれハ二申近  
江の五日枝の神社ハ滋賀  
の郡坂本よりあり

○神祭 此月  
祭ヲ  
多し名と云り  
きハ季よなる

○齋刺 神祭  
んとして

○神取 神祭  
皆祭の如き

三枝祭 大和国添上郡草川河原  
の神社の祭と云り吉日を撰  
むよ一拾

○吉田祭 中の子吉田  
の春日ハ中

米抄出

廿九

納言山陰々  
の建まきり ○ 駒牽 廿七日廿八日  
四月にあることなり八月も ○ 矢

洛東三十三間堂蓮華王院と  
數 池の中杜若と壯觀とも凡

この所の矢数毎年四五月永日の  
のち晴天を候て作まるあり  
江の嶋掃除浪 相州横の志ま  
嶋島月一日波濤突衝して嵐のう

ちよ入るも天女洪波を以て嵐中  
の汚穢を拂ふ也 ○ 松前渡  
と掃除浪といふ

是ハ南部津輕の商人産物支  
易の爲之帳夷松前へ渡ると云  
凡北海冬春の間空気強く波お  
かやうなり故に四月より出

岸より ○ 梅天 唐人成都を以て  
南京とす蜀中の  
梅中則四月よりありと云四月の  
梅雨と云ふ熟梅天黄梅天と

つゞきと略し ○ 和清の天  
て梅天といふ

も清和の天を云ふと和清と襲嗣  
一もハ清和の時と避るる事係代  
物語ハ和して ○ 煮酒 酒の気  
又清 味と生

する者又煮酒の法と用ふ ○ 余花  
京師と云ふと酒煮と称す  
春小おきて ○ 若葉 新樹  
青葉の中候

葉 紫と葉の 若葉の楓 若  
ね交るなり

葉の花 病葉之紅葉  
カク 病葉之紅葉 ○ 夏木立木  
黄 病葉之紅葉

茂ふ木下閣 ○ 葉櫻 桜の葉  
夕花 山うつ木。新根うつ木。ニツ葉  
ころ木。唐うつ木。岩本うつ木

以上夕の花  
の異名あり ○ 夕花 夕の花  
る雨と ○ 桐花 白桐。黄桐  
りて



梧桐 桐は似て皮青く葉皮を一日  
月の園と知る一は是て十二

葉あり下より加えて十二葉の中  
小葉あり八其月用之風風の柵とする

ハ此 ○檀の花 杜仲。思  
相之 仙。木綿 ○枳

花 紫ハ橙のつく木 ○蜜柑の花  
橘の白花を謂

大和本州小其花を ○柑子花  
子と云 ○乳柑花 橙より

子と云 ○乳柑花 橙より  
也云 ○乳柑花 橙より

橙の花 ○柚花 花香甚  
○

金柑の花 白き云 ○雲州橘の

花 佛手柑の花 実熟し  
て人の

故は似たり ○橘 包橘。靈橘。  
軒生草。昔草

一名と名づく ○庭古州。とこよ云又  
一名と名づく ○厚朴の

花 葉櫛の葉に似て鋸葉  
花 葉櫛の葉に似て鋸葉  
花 葉櫛の葉に似て鋸葉

花 ○山椒と ○椶櫚の花 送の初  
め魚の

椶櫚或は椶葉と云 ○柳の花 材は  
七ツの

妙ありこ多壽ニ多陰ニ三身の葉  
有 四ニ虫喰む五ニ霜葉玩ふ六

六ニ実ある七ニ落葉あり八ニ中  
久きと云九ニ中と材の七絶といふ

槐の花 月夜咲 ○柑類の花

花 柚 ○繡毬の花 ○山菅の

花 白き云 ○要の花 金様子  
紅毛淡

○箱根淡 ○木天蓼 和名和太々  
非今批り

てす ○藪椿の花 ○覆

盆子樹 蛇莓。つよ ○牡

丹 除ん草。名取草。廿日草。  
富貴草。夜白草。てりされ草

○鐘草。くま ○山橘 豊橘 共  
りき。花王 小

牡丹の百牡丹 名は白ありて  
重き名

紅牡丹 ○芍薬 一色あり。えびせく  
くせり。名

の草相。えび 燕子花木  
草小馬蘭

○杜若 燕子花木  
草小馬蘭

とあ 貞吉草 加不 花 花 花

以上杜若の異名之白花くハ白名の  
唱ころ咲名の名之又白花ハ芍薬を  
いふも之より百葉

○嬰粟の花 嬰粟とあり

葵 二葉草。芍薬。立葵  
。小あふい。銭葵。水葵

○知 母の花

○一八の花 異名と  
紫羅草

阿片 鴉片。阿芙蓉とあり  
あへんハけ此名の津液

踊花 ○白頂花 ○美人草 虞美人草とも云  
け此名ありて名小也

○宝鐸の花

花 花 胡蝶花 ○ 小垂る青白色あり

茶挽草 崔麥穂あり  
味ハ麦ケリ ○刀豆

花 色淡  
紅 ○紫蘭花 紫園の  
紫又白

○風車の花 ○虎耳草 虎耳ハ葉小よりて名づく  
ゆきの下ハ葉よりて名づく

鴨足草 針のちうま  
ちうま

○根都古草 猪殃々  
或ハ八重むらう

○蘭の花 ○玉卷葛 芽出りの  
新葉未  
開

○玉卷芭蕉 物草葉と  
ゆき

○荀 竹筍。初莖

淡竹筍 ○紫竹筍 味ハ俱  
小同

篠筍 篠ハ小竹小して俗  
ハ筍と呼ぶもの

○夏

三十二



あつもの流は来ることを經のふね  
しつし漁者此の漂流を  
見て經獲るその海  
備はこうるそぞ  
○生節 鯉の  
いま

○脯とかりらるる心のなり  
江戸の俗是を在りふと云

○鹿の  
庶草の表はて四月より生  
ふる角ハ袋のやうに袋角

と平小て心  
○蚕の蛹 蚕繭の  
蚕蛾眉を  
季と拵り

作る時と  
○枝蛭 木の枝をまむこ  
いごと云 雨蛭といへり

○書貞 ○翫  
○書貞 翫  
○翫 翫

○書貞 ○翫  
○書貞 翫  
○翫 翫

○書貞 ○翫  
○書貞 翫  
○翫 翫

○書貞 ○翫  
○書貞 翫  
○翫 翫

○書貞 ○翫  
○書貞 翫  
○翫 翫

○書貞 ○翫  
○書貞 翫  
○翫 翫

○書貞 ○翫  
○書貞 翫  
○翫 翫

○書貞 ○翫  
○書貞 翫  
○翫 翫

○書貞 ○翫  
○書貞 翫  
○翫 翫

○書貞 ○翫  
○書貞 翫  
○翫 翫

○書貞 ○翫  
○書貞 翫  
○翫 翫

○書貞 ○翫  
○書貞 翫  
○翫 翫

○書貞 ○翫  
○書貞 翫  
○翫 翫

○書貞 ○翫  
○書貞 翫  
○翫 翫

○書貞 ○翫  
○書貞 翫  
○翫 翫

○書貞 ○翫  
○書貞 翫  
○翫 翫

○書貞 ○翫  
○書貞 翫  
○翫 翫

○書貞 ○翫  
○書貞 翫  
○翫 翫

○書貞 ○翫  
○書貞 翫  
○翫 翫

の甚 柚山椒 似て香氣抽櫛の影

又似り実長 崖椒 桑大は

を開き実ハ緑豆の 刺葱 春

なり初生 馬齒莧 醬弁草

和名と別 路 秋冬花

草 七種あり。紫。赤。青。

藜 日苗とハあつものとして食ふ

○根竿 和名ハからり

海松 水松状チ松のくく小

草の花 ○蚊蚊帳 蚊遣

火 蚊火と 蚊柱 蚊の多く

蜻 蛭子 水蛭 草

蟻 蟻子 蟻 蟻

○書貞 ○翫  
○書貞 翫  
○翫 翫

○書貞 ○翫  
○書貞 翫  
○翫 翫

○書貞 ○翫  
○書貞 翫  
○翫 翫

○書貞 ○翫  
○書貞 翫  
○翫 翫

○書貞 ○翫  
○書貞 翫  
○翫 翫

○書貞 ○翫  
○書貞 翫  
○翫 翫

○書貞 ○翫  
○書貞 翫  
○翫 翫

○書貞 ○翫  
○書貞 翫  
○翫 翫

○書貞 ○翫  
○書貞 翫  
○翫 翫

○書貞 ○翫  
○書貞 翫  
○翫 翫

○書貞 ○翫  
○書貞 翫  
○翫 翫

○書貞 ○翫  
○書貞 翫  
○翫 翫





を供也 四日山塚の所園より内膳  
司の面々早瓜と供一を

○菖蒲膏 四日都都となく  
ふくの朝よあやめ

をふくすハ仲夏の時節毒虫多く生  
まらふより是をちやうんぬりかりす之

蓬ふく 是七あや  
め小目ト ○端午 端五と  
ハ初五

とふがごとく月ハをまの五の始あり  
日ハを月の五の始なり 端とハけ

とんぐト ○天中の節 五日午の  
め刑を 刺をまう

てまう ○艾虎 艾人。艾虎ハ艾と  
りんこ 以て虎の形を造り

或ハ糸をまうて小虎と 是艾也 ○  
柴よつけて内人多ひいづくあり

天師と画く 端午よ初んで所  
を画き是をまふる

又泥塑の天師を作り艾を以髪鬚と  
し蒜を拳と 門上よ並て邪をさ

く ○儀方を書 五月五日寸許の  
紙に儀方の三ま

をちて赤の四方よ結まれ  
ハ平年蚊蠅と退くとま ○糝  
菰

ちまき。角黍。錐粽。艾粽。秤錘  
粽。九子粽。笹粽。餡粽。飾粽。

かざり粽 ちまきハ千巻なりおむくま  
といふをふてまて毒虫とまきまやま

といふ 引とゆひ糸 是も粽  
をまう ○飾

兜 けづの掛 五日異名 重五  
の加ぶく 重午

○端五。端陽。地臘。蒲節  
○解粽。天中。艾節。朱符 ○

菖蒲引 あやら菊。沼澤あや  
小あらしちて引をり

菖蒲鬘 聖武帝の時小初ふ  
より 続日本紀小出あり

菖蒲案 菖蒲生菰まを異  
木の加よてまう ○

蒲枕 菖蒲帷子 菖蒲  
浴衣 ○

蘭湯 小浴を菖蒲湯 五  
月

五日蘭湯は浴し芳料は浴も蘭  
ハ沢氣之その匂蘭花よりあらは

菖蒲酒 石菖を切て酒よ浸  
て是を吞雄黄とせ

草蒲 一切の邪気をけくする

刀 本刀のうしろを草蒲つくりし草

蒲胃 蒲の胃 蒲の根 長根

合のこ 〇幟 飾甲。この日幟甲 一とや 〇幟 飾事。光仁帝

の時蒙古の徒来より早良親王討 手として出陣あり親王伏見ふち

の木の社に祈る時五月五日忽 地は風吹き海あきく戦いして

勝をとりて是を佩き 〇棟と佩 五日 此例よするもの

ハ悪気を逐ふあり 〇樗菅 樗の 葉をとりて是を佩き

めのことく新よふくこと田舎ハ 檉竿の日樗の葉を菅目しありそ せんたんと 〇薬日 五月五日日

りハ本なり 〇薬玉 五月五日日 薬玉 取或ハ丸散烟合せる

五月のむしものり。今日薬草と五 色の糸よて洞(臂)よかきハ悪気

と拂ふくや夢よふぬ 〇薬草 さいあやめともあり

摘 五月五日と五日とひいて 〇競 此の日一切の薬草と採り

馬 馬ハ四五月の 〇百草と闘 唐の中宗の時安楽公主端午

命縷 命縷五絲絲采索 小百草とたこふひこふ

五色縷 五色縷 〇長 唐の中宗の時安楽公主端午

以上の方よ 〇印地打 童の小ち 〇印地打 童の小ち

〇競渡 鳥車。水馬 競渡ハ越王勾 踐よ起る五月五日の競渡ハ屈原と

戦とす。屈原志の日と汨羅小死 是人船とこれと救ふ今の競渡こ



まその邊  
凡ことぞ  
○左近の真手結  
近

の馬場にて誘射するなり五月二日  
ハ左近の荒手結四日ハ左近の荒手  
結五日ハ左近の真手結六日  
○むと  
ハ左近の真手結なり云々

りの日  
この日五明隨身禱のま  
り  
と打ててまるとむむとりの日

引折の器をさへ  
○粉團と射  
唐の宮中端午毎に粉團角菴を  
造りて是と射るありしもの食ふ  
くくと得る蓋粉團滑膩やして射  
かす都中盛に此戯と云々云々

能邪氣を壓伏し百鬼を制し今の  
人門上は柳符と打て邪を避ふ  
ことと云々

○鳥の糞鳥の糞  
五月五日危の糞とつらう百夜は路よ  
又鬼の糞と云んまその悪毒を以て  
のゆえよと云々

○鳩鴿の舌と去  
官ふありと云々

桃印符赤灵符  
桃ハ西方五木  
の精也仙木之

騎射馬  
○騎射馬  
そ此夫と去る時治と結と

神水  
重五の日午の時雨よりハ急  
は竹と切へ一竿の中よま  
る神水あり是と吞めハ百病を  
治す或を丸薬と製まへ

加茂競馬  
五日この競馬ハ七十二  
代堀川院宝治七年五  
穀成就天下泰平の為始て十番是  
の馬料と寄らる例年是と行比  
めゆ

○藤の木林祭  
五日山城国  
紀伊郡深神  
をり

○新宮祭  
五日  
大津  
山の南よあり坐  
る神舎人親王之

○生  
新宮坐ハ三井古の山中よ移ア  
是と執る坐る不新羅明神

玉の流鏝馬  
五日持味公赤生  
郡天王まの辺よあ  
りある所の一坐

○六日菖蒲  
京  
江  
りある所の一坐  
天生玉の神なり

戸の俗屋上よ菖蒲の菖蒲とく  
りて菖蒲湯く是よ浴長よ是

三十九

五日の夜の雨露を受る ○宇治  
あまて神水よるあまて

祭 八日離宮の社ハ山城必宇治郡  
宇治の里ありあるあ三坐

忘神天皇菟道雅 ○今宮祭  
郎子仁徳天皇なり

九日之今十五日と用ゆ山城必愛宕  
郡紫野あり紫神午頭天皇な

る ○室祭 十三日揚州室の津  
よ大社ありあ神

上賀茂は因例 ○竹植ふ日  
糸五月十三日

五月十三日と竹酔日とす又竹  
迷日と云此日竹と植其必活と云 ○

両社祭 廿三日江州下坂本より唐  
崎に至るの路傍より両社

あり南ハ岩宮權現北ハ酒井  
大明神之主大本居神と崇まる ○有

無の日 廿五日八村上天皇の御  
国忌之依て禁裏は政

事ナク然其急用ありハ  
行も有無といふや ○住

吉の御田植 廿八日揚州住吉  
あり神田と植ると

以て神事 ○大原志 丹波必新  
と行ふ之 田郡よあ

り祭神一坐伊弉並乎伊弉諾昔  
天照大神と以て三坐と此社ハ

清むると昔よりむらむらと  
名日醴と醸して神事供客

小也餐忘り又商ものともまらぬ  
えく世俗甘酒をとりあそ

御田扇 伊勢山田太神宮の由  
田植之此神の家前よ

て神事修行の扇ありこまを扇  
田扇といふ是を以て田とあつて風

情をさすを虫とせむる患を  
く又産婦も此扇を求てお向ふ宗

の櫃よりくまハ極め ○五月鏡 五  
て産安しやと

昔唐山楊子江ふて銅を百と鑄  
ひて鏡を鑄さけりといふあり

り是を以て本鏡 ○虎が雨 五月  
あまも海さるる

多く雨ふると虎が涙の雨といふ是  
ハ昔大蛇の虎といふお女が赤松坂

とお別る候変して雨ふるなり  
世俗々日の雨ハ虎が涙をりといふ

賑給 賑給は後一き民よ米陸等と  
より給ふ事 〇祇園の神輿洗  
晦日祇園の社に詣り各杉の葉を  
法て禍災を拔ふ第後といふ後よ  
入て神

〇富士垢離 五月廿五日  
奥洗あり 二日すて富士の行人毎日河辺に  
出て垢離を方し富士権現を遙  
拝せ是富士系

〇五月雨 徴  
梅雨さこころ五月雨クタルの  
晴さるる雨をさくして晴ぬもの

入梅 墜粟花。國人立友の後庚  
種の後壬の日よき  
と以て出梅とせよ

〇五月闇  
〇白く黒く  
白くく入梅のちち  
小る陰まかりとく  
晴んともるささみせつふ。黒く  
とハ空か曇りてくも陰やまの  
内よ又晴るや

〇半夏生 五月  
中より

十一日あり世俗この日と致して  
竹の子を食うは竹節虫とせ  
まろの  
なあり 〇蝉の初声 〇鶯音

と入 〇反舌無声 礼記の疏は  
反舌と蝦蟇  
〇帷 親名に云帷ハ圃を以て  
自障と圃之和名加太鼓

〇衢が花 古代帷の添色とつり  
脱つてつがふとつりふささ  
のこくなきは反とそまふまはけの  
字ハ假名さか 〇羅 齊よつづる  
りつとくさ

若竹 〇新竹 〇列玉草 河玉  
草 竹よ若竹 〇筧比竹 細長く節  
の異名之

〇業平竹 雄竹のつり  
竹よ用中 〇観音  
観行は似たり女竹男竹の  
んかたをさな業平と云

竹 〇志乃竹 布袋竹  
〇夏 四十一



子ハ色々の不あり梅子ハ色々の形よりく名づけ梅搦子ハ色よりての名を  
石竹 を二種ともまきとも搦  
小もる竹と云 目くらま竹と云  
ていこよあり

り草下と云 つづとも搦  
のまきと云

女貞 貞木。葉もちの葉細く白  
まき開く葉ハ枝へ似てまき

核又下と云 四五月の以  
白と開く

かり葉ハ女貞 強羅  
似て葉光あり 重箱

百合 まむら車  
り接しまきと野の日光の産

出る 透百合  
あり 透百合

百合 山丹。百合は似てまき  
小き葉ハ柳に似たり

百合 花ハ深山  
よりと名づく 袂百合

紫陽花 一名四葩の花。花紫とも  
小手鞠に似たり唐の白

赤天 名つくと云  
紅の花 紅

末摘花 花の色紅み  
て紫藍に

張響 てて種と天竺より得て  
る本朝へ傳へるハ吳より種を得

下毛の花 漢名末洋小木  
之 花の色ま紅あり

酢漿草 一名酸母片葉ニツ  
花 一名酸母片葉ニツ

夏菊 六月は開く八月に至る  
草 草の香氣をこもの

萱草 合歌之を喰へん  
草 合歌之を喰へん

鉄線の花 花譜  
及ハ

三才番繪も纏枝牡丹と裁りり  
是鉄線のさるせりふあり

朝露草 一名銀錢花とはの形  
楮よ似て白青うるこあ

り高サ二尺才枝あり船  
又らミタミ某むなり ○蚊帳釣

草 莎草ホの類かの葉よ  
似て其くまこのくあり ○天

門冬花 和名をまろくこ名くこ  
まこうら。海辺にまる

ものく葉ハ移の ○龍葵 莖葉あふ  
こく和こあり ひよ似く

実ハ茄子の小 ○石菖 ○花菖  
また小似り

蒲 葉あやめ ○紫羅欄花 ○

時計草 名日の内よろくか  
まる依て時計の名あり ○

花うつみ 薦のみをり ○菱の花  
只かつこも云

この名日よ背て昼合一夜  
燈月ままうらひて持移ま ○真菰

薺 ○藻薺 藻薺船  
藻の花 ○和布

刈 正字石薺之紀州加田 ○海帶  
より出るとカタクソム

薺 ○胡麻時 ○秬時 ○李

杏子 甜梅 ○梅漬る梅干 梅

剥 皮内を剥りて軀  
乾し梅酸とまるなり 青梅餅

梅 枳雨の時熟まその肉 楊梅氣  
黄みで津あく液多し

條桃 ○無花果 映日花。優  
曇花云々く

くて実 ○天仙菓 紀州山中にあり  
のるこ 曇ハ 曇あくて実を

結ふ枇杷に似て小 ○枇杷 ○桑  
くく小兒好く食ふ

實 正字 ○薑 ○生胡桃 ○

早松茸 五月小虫 ○茄子 異名  
菴瓜。草薺甲俗説は秋茄子嫁を

食まるくいふいふいふいふいふいふいふ

集のおもあり 初加子 正名。新  
茄。和系

加よく出  
瓜の花 諸瓜はよく  
る物あり

○瓜の花 諸瓜はよく  
る物あり

早瓜 浅瓜。白瓜  
干瓜。青瓜 胡瓜 黄瓜 姫

瓜 色白く甘きゆえ姫瓜といふ  
子よりつくきしもの瓜はゆる

児のう  
○栽植る 種植 移栽

菊椿梨 ○壅培 橙橘菊牡丹  
植替り

○獸狩 射 射

鹿の子 麻弾 ○魚藻打 魚  
藻の子

水鳥の巢 澤巢 諸

鳥毛と替 羽脱をこめ以法を  
代毛よりらんとて羽ぬ

○毛と替る 鷹 此以ゆけて  
七月とよ

○黒鳥 大きくまて黒く鳥よ  
こあり味ひ美からば

鳥の子 俗鴨といふ誤  
り鴨一名之 輕鳥の

子 かるの子は心 ○鳥鳴初 俗よ  
のうこのこと 百舌

百舌を八つと云ふなり云し ○鶉の

巢 堂系は巢 ○初蟬 蟬の吳名  
ふものなり

打磬蟬 空蟬といふ  
出くあり ○鯨 室鯨  
ハ伊勢

鯨 江下芝浦にある  
相州之 文日ヶ嶺の條あり

響子 酒乾の上を花去り後小蠅を  
かきおとすなり

水馬 鯉虫。鮎 ○豉虫 小さき  
賣くもの

蛇衣と 一名。こころせ蒲や云く

脱 蛇脱時やとくくも不浄と云  
是ハ即脱け或ハ大ニ飽時ハ又脱

ましく

六月

清神奥義抄に此月農事と  
もまままつゝさるるなほよき月と

以右田舎唐の説に五月と八かき  
る月の上下と時やなりとより此  
説よき

○林鐘 園林鐘ハ林ハ衆  
がぶら 鐘ハ衆ハあま  
るこく之物の多くあつたをり  
と俗鐘と鐘とて林の鐘もあまの  
あり大まら誤

○小暑 園夏至の  
後十五日斗  
一より

○大暑 園小暑後十五日斗末  
まあり 小建と大暑とを  
○季夏。瓜期。且月。邇月。朔月  
。陽水。風よら月。鳴神月。常夏  
月。蟬の羽月。

晩夏。水無月。

氷室 朔日氷室の水ハ四月朔日より  
九月晦日迄献まきと今日  
とさち

○氷室の御調 今日園  
とと

秋也 氷れおもの氷水めま  
おものハ熱月まは八侍略ふも  
氷を用るといふ氷水もくハ深氏

夜まふも月く氷水  
ハまやうなる水といふ 氷室の雪  
幽谷まれば清砂り 氷室の櫻  
ととまふあふぶら

月とまふ砂る ○水餅祝 朔日。ハ  
まといまらり 氷と  
傍る遠風ちり民間餅又 ○勝  
こまを氷はまらとらり

曼恭 朔日接州四天王寺の西門は  
あり本尊愛染明王毎年  
この日開帳と是と

○富士詣 朔  
日 袂の民人  
二山ハをふ

○江戸浅間恭 朔  
日 浅草駒込本不富四る坊ホのふ  
桂現の社ハ系詣まると土産ハ美売  
の蛇を色網

○忌日の御飯 朔日  
忌火 ちいんふ

くハ不浄の火と ○一夜酒 〇こま  
打ゆるとらり

○六月 是は八明日ハ供まらるるいふ  
名つけらるるその體といふ

會 四日修教舎又長持舎といふこ  
まハ修教大師の忌日ハ勅使宅



山の義あり弘仁  
十四年始て行り ○御躰の御

下 十日是ハ神祇友の人奉宮よこ  
七り王上の玉躰よ懐きあら

んこくを右  
ひ奉りし ○月次祭 是ハ六月  
十二月は

二夜諸社ハ所幣をまらせり  
うまかり弘仁年中よとらふ ○

神今食 六月十一日伊勢太神宮を  
勧請やませり天子ミ

つら神膳と供 ○解齋の御  
せせりふとや

粥 十二日この日の所坐の大床にて  
基盤一脚とて所禱赤き土

器よ和布の所汁物を添らとを  
り二口めさきて所蓋をくると

あ ○鳥越祭 九日この神社ハ  
江戸沙草を城

所よあり社主徳木氏より別當を  
長末ちとふ系社天児登根命日

本武二 ○祇園祭 七日十四日入  
皇六十四代田

融隆天禄元年六月十四日よとら  
する此祭二十七年の降と出ま。

長刀鉾。函谷鉾。洲濱鉾。雞鉾  
。菊水鉾。月鉾。三本船鉾等こ

その外 ○河原涼之 六月七日よ  
り十八日のお

よいりて四条  
河原の涼之を ○江戸天王祭 元

のそめ次は流疫せり官に流  
なり神田明神の社地に勧請ある

不の祇園三社の神楽と出て街  
頭と渡所よりより疫と拵ふと

い ○祇園臨時祭 十五日田融  
佐の由宇天

延三年六月十七日 ○巖島祭 十  
五

初て行りしとあり  
日藝州佐伯郡官島よりありなる神

三聖市并島姫神田々姫湊織津姫  
あ ○竹生島祭 十五日江州の湖

神魂聖武天皇天平三年 ○津島祭  
辛未竹生島の神現と伝

十四日十五日午頭天王の祭尾張国  
海辺郡門首の庄後波の里よあり

社より西海の對するよくあり後よ  
尾張の海辺よ移る仍てその旧地也

名を表して ○芦の神輿 津島 津島とよふ

毎年芦の神輿とよふとあり用 ○  
中の疫疾変異ホをトシ

熱田祭 神社尾張国年魚市郡江崎松 崎松 崎松 崎松 崎松

○江戸山王祭 十五日神社 江戸水田

○氷川祭 江戸水田 風土祀よ小ら此

○浅草寺び 鳥音音稱同此詳云

○かつ 草もよ於てを日びん

○相國 宝と中略ちありとそ又二月十二日

○嘉定錢 嘉定喰 嘉定

○相國 宝とあまハ勝とよふ名詮

○相國 を賞翫するものトヤ

○相國 を賞翫するものトヤ

寺懺法 十七日洛の相國も園工 於て懺法と倭もそ園

伊勢祭礼 十六日十七日外 博

多祭 十五日博同柳田の神ハ筑前 國那珂郡

志渡寺祭 十五日 於州寧河郡補陀洛

○西園寺殿妙音講 十六日 日或

座頭の涼 十九日 盲人清聚庵

○鞍馬の竹切 廿日洛外 鞍馬

ふ是也 あり竹切とよふ數十の竹と截

て天と祀る是毒蛇と退治さむ

夏 四十八

るの法を ○御手洗詣十九日よ  
りし云々

すて加茂の内 ○紵の納涼山城  
社にてある

宿郡あり紵或ハ只洲又作る云々  
紵の宮と云蓋地名よりて是と

称す ○上難波の御板攝州東  
云々

高津の宮ありありの社ハ生玉の宮  
あり糸社比賣古曾の神本名ハ

下照姫 ○坐摩の御板廿二日  
命あり

阪郡坐摩太神宮不て氏 ○愛宕  
子の市民をくくするなり

十日詣廿四日丹波国桑田郡水雄  
の小よりあり糸社伊弉諾

昔火産灵不のむさひの此日祭詣 ○橋立  
まれむ十度はあると云

祭廿五日丹波不与佐郡良の方  
は速石の里あり里中ハ長き大

崎あり是と天の橋と云々又の  
名と久志淡或ハ久志の渡と名づく

天満の御板廿五日抄州西成郡  
天満はありある

神菱家 ○住吉の御板晦日  
の灵々 毎年

六月晦日但と小 ○加茂水無月  
月ハ廿九日あり

能六月晦日夜上賀茂の神子  
音あり乃子枝と修せ云々

名越の枝荒和の枝名越ハ  
長越の畧なり

剋金剋剋剋 ○麻の葉流を  
と枝ふり

麻の葉と切て幣と ○唐崎祭  
一後より川は流せ

晦日近江国唐崎大明神ハ ○節  
女別當玉大宮初題の地あり

折晦日竹はて主上の所さけの寸  
法ととりてそ種は朽あてく

ハよどりく云々の令ぬ宮口  
まよ依せて所枝とつとむる

大赦晦日百女悉く朱菴 ○茅  
門はありて枝とむる

の輪午頭天王の種民は来り教  
りハ遺風疲病をやる時是

とかく是ハ災難と通る ○管母貫  
方りその播ちやて作

茅の穂と同物なり茅茨 ○形代  
ホとつづくるものなり

○檜ひの抄枝しりはるよ人形にんがたを作りそ  
そまを擡たて身の受給うけくと枝えは川がわは流ながれ

○夏神樂なつのかみ川社がわのやしろ  
川がわは柵しほりを  
採とりて神

をすつりて夏なつ板いた夕ゆふ板いた御ご板いた

川がわ○鎮火祭ちんかまつり 晦日みそひト部氏べのうぢの人  
火ひを打うて官城くわんじやうの

四方よつうの隅すみにあるまり ○道郷みちのくに食祭けまつり  
火ひをあげてかんあるまり

晦日みそひ是こゝ七しち都との四方よつうにあるまり鬼魁おにけいの他  
方かたより来きるまり入いるまりあるまり

上うへは世よ世よと ○小蠅せむしふは神かみ 蠅は  
傍かたへあるまり

こゝこゝくく悪邪あくじや多おほきとよふ日本紀  
又また出いつつ是こゝ七しち友ともの熱邪ねつじやをあるまり

施米せまい 东山とうざん西山せいざん小山こざんをあるまり  
つつままるまり法師ほうしをあるまり米陸まいりく

ホと施せさ ○雷鳴らいめいの陣じん かかな  
るまりあるまり

三度さんど高たかくくままりハ大おほね以下いげ近衛ちかゑの  
次つぎにあるまり予よ前まへとあるまり一ひと尾おの孫そ

廂せう候こうして天子てんし ○大山おほやま 廿月にじふがつ  
と守護しゆごをあるまり

より及および近國ちかくにの俗しやく相州さうしゆ大山おほやま石  
首くび大おほ権けん現げんへ糸いと結むすままり是こゝを初山はつやまと

ソそ又また七月しちがつ血ち中ちゆうにあるまり ○温風おんふう 廿月にじふがつ  
山やまをあるまり

雀風せうふう 六月中ろくげつちゆう東南とうなんの風かぜ ○鷹たか  
是こゝハ是こゝと黄雀わうせう風かぜと云いふ

羽遣はねぢいと學まなぶ 雛ひなの志こゝろをあるまり  
令しんとあるまり

腐草ふくそう螢えいとあるまり 月つき ○溽暑しゆくしよ 暑あつ暑あつ  
令しんとあるまり

三日さんじつ ○夕立ゆふだち 白雨はくう。凍こ ○三伏さんぷく  
三旬さんじゆん。夏至げしの才さい三さんの庫くらと初伏はつぷくと

四よの庫くらと中伏ちゆうぷくと立秋たつあきの後のち初はつの庫くら  
を末伏まつぷくとも是こゝ ○天貺てんていの節せつ 會あひ

を三伏さんぷくとあるまり 要かなめ

云宋いんそうの宗祥そうじやう四年しよんねん詔しうして ○土用どよう  
六月ろくげつ六日にちと天貺てんていの節せつとあるまり

王用干わうようかん 虫むし ○鴛鴦うんおう涼すず 涼すず  
虫むし拂はらふ

是こゝへあるまり水みづの類るいは  
七しち涼すずとあるまり ○露涼るすず 風かぜ

薰る ○青嵐 夏木立の梢の  
緑をよそあら

もとい ○雲峰 夏雲多奇峰と  
ふあり 陶淵明の詩あり

○炎天日盛 日やけひうら  
日まけ 日傘

浚井 曝井としり 納涼 川  
井たぎのま 系涼

○川まき 川涼 舟  
まき 舟遊ひ 波すら

○泉 清水結 清水汲  
滝 清水せき 清しと

○薰衣香 白袋 水掛合 反敷  
ひ袋 水掛合 反敷

水辺をみて水 萬鬼行 後  
け合まるとりよ 漢

の時伏日ハ鬼出るとして尽日  
を閉或ハ湯餅を作りて辟鬼と名

づり ○竹婦人 竹地 脚馬  
とり 抱籠をべて

竹の籠をとりて或ハ足をしりせ  
ふじて涼しむるうつらしのこ

○川 箆枕 竹を以て毛を作るこ  
ま涼しむるうらま

狩 纒 四ッ手 纒 ○鯖魚 青魚  
持細 撒網 鯖魚 その

をまきしゆ名は名つく大ちりしのを  
鱈魚と名つく和名ありあり海

中ふて ○海月取 海母取  
釣あり とし虫 ○鶴

鷹 鷹はいさうとらまあり  
中ハハの羽とらまあり

ハ飛し弱 ○練雲雀 此は毛  
く取やと 練雲雀

あつとせあらふ信 ○蠨 臙俗は  
よんで練雲雀をらふ 臙俗は

水道蠅といふのあり交河をいよ  
生まるとのあり房総三州の俗に

是をよ介 ○燈蛾 燭燭 火が  
臙といふ 飛燃形は黄

蝶といふて ○空蝉 是はての蝶を  
枯濁といふ 空蝉

蝉の諸声 多くうらひさ  
蝉の

脱 俗はよみぬ 蝉時雨 採の多く  
けがらあり 蝉時雨

してまきまきハ採の  
鳴きまきまきハ採の

きと通俗志は六月に出る ○金亀  
秋ハ虫類多くあるなや

子。蛟蟻 ○鳥毛虫。蠹。蝨  
。蟬金。蠹。蟻虫

子。蛟蟻 一名地虫又根掘虫といふ  
蟻蝻 多く土中又生れ又糞の中

小。 ○青田 六月まで田八葉よ  
せむ

り。田草取 夏より秋より  
七あり

とる。百日紅 紫微  
花。怕

痒樹この木と猿滑といふハ皮  
をめららみして猿の皮といふ

名づく ○竹の皮散 竹の皮脱  
又皮剥と云

て。鳥扇 射干。ハ  
又あり

同物とせり然と心取ちちち  
葉長く弓のやうなるもの射干に

莖短く葉扇のごとくな  
らひるものハあり

○荷葉 蓮の葉之浮葉  
と藕花といひ

五葉と艾何といふ或ハ葉と若  
と云根と藕といふを蓮と云

見草露堪草つぎふ茶

以上蓮の異名又花君子藕  
花羽花凡露郎と云

慈姑 燕尾草と云形ち  
燕の尾に似たり

○河骨 燕尾草と云形ち  
燕の尾に似たり

○菱の花 五六月は白  
花開く

玉簪花 白雀山と云大なるもの  
と俗に亀がうといふ

馬鞭草 色はて種  
と云

猫児眼睛草 沢漆。野  
此草の形燭臺の

○鉤鐘 紫花を用形約鐘のこ  
一すく白を淡紫の葉あり

○麒麟 紫花を用形約鐘のこ  
一すく白を淡紫の葉あり

○虎比 高サ一尺より形  
弁慶葉に似たり

尾草 色白虎の尾  
の形に似たり

○晝顔 鼓  
の形に似たり



瓜の種よほゆる  
ゆえことせしふ ○夏引の絲 麻

瓜の種よほゆる  
ゆえことせしふ ○綿の花

瓜の種よほゆる  
ゆえことせしふ ○青番椒 俗に  
南蛮

瓜の種よほゆる  
ゆえことせしふ ○蕺菜 俗に  
あるを

瓜の種よほゆる  
ゆえことせしふ ○豇豆 小角豆  
を秋めうくとく

瓜の種よほゆる  
ゆえことせしふ ○蒜の根

瓜の種よほゆる  
ゆえことせしふ ○甜瓜 濃  
州

瓜の種よほゆる  
ゆえことせしふ ○甜瓜の鼻祖  
百は出ツそ

瓜の種よほゆる  
ゆえことせしふ ○干瓜 白瓜を干て  
そのを玉て白

瓜の種よほゆる  
ゆえことせしふ ○瓜の皮 松山侯の  
所著して

瓜の種よほゆる  
ゆえことせしふ ○熟瓜 甜瓜の種を  
味す芳ま

菜瓜 白瓜とも 南瓜 以本朝

一種とめて長崎に作るものより法  
ふよひろなる形丸くひらくも

南蛮より渡るといふ 南瓜  
以て南瓜の名あり 同種

類なり 秋ちびんごりのごとく  
かやぢや唐ちびんごりのごとく

胡地より出 阿古陀瓜 形も南瓜  
いと似て

是ハ甜瓜のひとく 金瓜銀瓜 揚  
州 煮てて食すもの

免系郡四辺村小浜村より出ツその  
色美金のごとく 三州より銀瓜もツ

その色白 青瓜 瓜のひとく 水瓜  
是西か之塔山の井 白梵天 梵天  
よ出也秋とら

瓜の種よほゆる 瓜のひとく 瓜田  
瓜をりし但蔓花と

瓜の種よほゆる 瓜のひとく 瓜田  
瓜をりし但蔓花と

瓜の種よほゆる 瓜のひとく 瓜田  
瓜をりし但蔓花と



未だ<sup>も</sup>未<sup>も</sup>だ<sup>も</sup>とふ  
○汐見坂 茶色の

海藻 ○紫蘊 赤蘊 桂柱

大小二 ○林檎實 ○夏桃

奈良漬製ス ○納豆製 ○

醬油製 ○醬酒つくる ○夏

切茶 六月の始宇治の茶人新茶

○麻地酒 豊後の必

水飯洗ひ飯引飯乾飯

奥州仙臺及び河州<sup>ろ</sup> ○葛水 砂

水冷水賣 江戸の街を多桶一

冷水と 振舞水 及日市井の向小

柄抄茶碗木と浮世茶を考ふ  
○ 苦くむくとくはと天をむむとく

